

令和2年6月15日

各位

山形市野草園：山形市大字神尾 832-3

電話 023-634-4120

山形市野草園からのお知らせ



「ひょうたん池」の白いスイレンと「吉林の庭」の淡紅色のスイレン

スイレン(スイレン科)

水底の土中に根と地下茎があり、葉と花は水面に浮きます。スイレン属は花が美しいのでよく栽培されます。葉の形は円形で一方が深く切れ込み、花弁と雄しべは多数あり、雌しべの柱頭は放射状になります。「睡蓮」の名は「朝に花が開いて夜に閉じる」つまり、睡る蓮ということでした。「ひょうたん池」には白いスイレン、「吉林の庭」には淡紅色のスイレンが咲きます。野草園では9月初め頃まで見ることができます。

間もなく夏至。野草園はすっかり夏の装いです。標高550m程の野草園も、先日は気温30℃になりました。園内の「ひょうたん池」や「吉林の庭」の池にはオゼコウホネやスイレンが咲き、「太平沼」にはヒツシグサが咲いています。また、湿地の「水辺の花コーナー」では青紫色のカキツバタとヒオウギアヤメが咲き、間もなく紫色のノハナショウブが咲き出します。

木かげを散策しながら、夏の水辺の花に会いにいらっしゃいませんか。

《 開園時間短縮のお知らせ 》

6月1日～8月31日は午前9時から午後6時まで開園予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策及びクマ侵入に備えた安全確保のため、午前9時から午後4時30分までの開園時間とします。尚、入園は午後4時までです。

※9月以降の開園時間も午前9時から午後4時30分（入園は午後4時まで）となります。

《 5月に引き続き 》

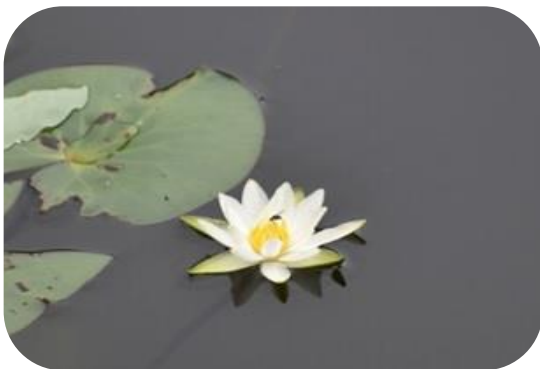
- ◆「ホタル観察会」など、6月のすべてのイベントは中止いたします。
- ◆「自然学習センター」と「カフェやまぼうし」の再開は、今のところ未定です。来園前にホームページ又はお電話でご確認ください。
(<https://www.yasouen.jp>) (023-634-4120)

◆◆◆6月後半に見られる主な花たち◆◆◆



オゼコウホネ(スイレン科)

水の中から顔を出した黄色い棒付きキャンディー、そんなイメージのオゼコウホネです。花のまん中にある雌しべの柱頭盤が赤く、とても綺麗です。尾瀬、月山の湿原、そして、北海道の一部にしか自生しない、隔離分布の貴重な種です。氷期の生き残り（遺存種）と言われています。



ヒツジグサ (スイレン科)

花の直径は5cmほどと、スイレンに比べるとずっと小さいですが、日本に自生する花です。ヒツジグサのヒツジとは、“未(ひつじ)の刻”（午後1時～3時）のことです。未の刻頃に花が開くからこの名前がついたといわれています。



ヒオウギアヤメ (アヤメ科)

湿った草地に生える多年草です。亜高山から高山にかけての湿地に生えます。花は、アヤメと同じように外側の花被片に紫色の網目模様があります。内側の花被片は小さくて、アヤメのように立ち上がりません。ぜひ、見比べてみてください。葉が楡扇（ヒオウギ）に、花がアヤメに似ていることが名前の由来です。



カキツバタ(アヤメ科)

水湿地に群生する多年草です。上品な青紫色の花弁に白い線、それがカキツバタの特徴です。どれも美しくて優劣つけがたいことを、「いずれ菖蒲(あやめ)か杜若(かきつばた)」というようですが、初夏の水辺で風に揺れるカキツバタは美しくて気品があります。



ノハナショウブ(アヤメ科)

水湿地に生える多年草です。名前の由来は、野生のノハナショウブという意味(野花菖蒲)で、全てのノハナショウブの原種になっています。葉の幅が狭く、葉の中央にある葉脈が太くはっきりして筋になっていることや、外花被片の線が黄色いことでカキツバタと区別することができます。



ガマズミ(ガマズミ科)

葉が亀の甲羅に似るので名前に“亀”がつき、“カメ”が“ガマ”に変化したという説があります。また、ズミは、酸っぱい実(酸実)のことと言われていています。カメズミ(亀酸実)が、ガマズミに転訛したということでしょうか。植物の名前の由来はおもしろいものです。



ヤマボウシ(ミズキ科)

ハナミズキに花や葉は似ています。それもそのはず、同じミズキ科です。花びらのように見えるのは苞(葉が変化したもの)で、その中心に小さな花が密集してつきます。名前の由来は、丸いつぼみの集まりを坊主頭に、白い苞をその頭巾に見立てたことが名前の由来です。



ニッコウキスゲ(ススキノキ科)

夏の高原と言えば、ニッコウキスゲのイメージをもつ方が多いかもしれません。花は、朝開いて夕方にはしぼんでしまう一日花、儂い命です。でも、茎の先端の蕾が次々開くので、ずっと咲いているように思えてしまいます。別名は、ゼンテイカ(禅庭花)です。



エゾアジサイ (アジサイ科)

北海道と本州北部及び日本海側の山地の斜面や沢沿いに生える日本固有種です。両生花の周りの装飾花の色合いが、コバルトブルーでとても美しく見えます。葉の縁に粗い鋸歯があります。ガクアジサイと似ていますが、葉に光沢がなく薄手です。見て、触って確認してみましょう。



ムシャリンドウ(シソ科)

リンドウと名がついていますが、リンドウ科ではなくシソ科です。花を見ると、「シソ科らしい花だな。」と分かります。名前の由来に、滋賀県の武佐に自生するからという説がありますが滋賀県には生育していないようです。葉の様子が、武者が儀式で扇子形に矢を背負う様子に似るからという説もあります。



スモークツリー(ウルシ科)

初夏に花を咲かせる雌雄異株の落葉樹木で、ヨーロッパから中国に分布します。小さな淡緑色の花を穂状にたくさん咲かせますが、雌株の花後にタネを結ばない花（不稔花）の軸の部分が長く伸びて羽毛のようになり、花穂の見た目がもふもふした感じになり、離れてみると煙のように見えます。



ヤナギラン(アカバナ科)

花が美しい蘭に、葉が柳に似ていることが名前の由来です。山地の日当たりのよいところに生える多年草で、山野が工事跡などで荒れると進出し木が茂ると姿を消す先駆植物です。茎の先に多数の紅紫色の花を開き、下から上へ咲き上がります。夏の終わり頃には、白い綿毛を穂全体からいっばいに出し、その様子もまた見事です。



ハコネウツギ (スイカズラ科)

花は初め白色で徐々に紅色に変化し、1つの木に二色の花が混ざり合い華やかに見えます。白と赤の花が見られるので、源平空木などという別名もあります。受粉が終わると花の色は紅色に変化し、虫に対して「私の所にはもう来なくて大丈夫ですよ。」と知らせているといわれています。受粉終了を知らせ、受粉効率を上げているのです。



アカバナシモツケ(バラ科)

茎の先に、小さな紅色の花をたくさんつける多年草です。ひとつひとつの小花からは、多くの雄しべが長く伸びて、全体的にふわっとした感じに見えます。葉は5つから7つに深く裂け、また、鋸歯があるので、モミジの葉のような印象です。接写で撮影することがおすすめです。



ウツボグサ(シソ科)

日本各地の山野の草地に普通に見られる多年草です。うつぼ(靱)とは、その昔、武士が矢を入れて背負った武具のことです。この植物の花穂がそれに似ていることが名前の由来です。夏の盛りには枯れてしまい、茶色くかさかさの状態になります。そんな様子から、“夏枯草(かこそう)とも呼ばれています。枯れた姿も印象的です。



ウリノキ(ミズキ科)

葉の形がウリの葉に似ていることが名前の由来といわれています。美しい白い花弁は外側に巻き込み、その真ん中の黄色い雄しべと白い雌しべが綺麗です。花後、果実は藍色に熟します。花と果実、両方の美しさを楽しむことのできるウリノキです。



アワモリショウマ(ユキノシタ科)

近畿地方以西の、四国や九州の山地などに自生する植物です。円錐状の花の集まりを出して、沢山の薄いピンクの小花をつけます。まるで、泡が集まったような感じです。その様子から、アワモリショウマという名前がつき、漢字で“泡盛升麻”と書きます。



ホタルブクロ(キキョウ科)

チョウチンバナ、ツリガネソウ、ホタルグサなどの沢山の方言での呼び名があります。茎の上に大きな鐘形の花をつけますが、袋状の花の中にホタルを入れて遊んだことが名前の由来といわれています。萼片のところにそり返った附属体があります。そり返らないのは“ヤマホタルブクロ”です。